

大学等名 大同工業大学  
 テーマ名 テーマ番号 1 : 地域活性化への貢献  
 取組名称 工住混合地域の街並形成へのデザイン提案  
 取組学部等 「全学」  
 取組担当者 建築学科 教授 笠嶋 泰  
 取組期間 平成16年度～平成18年度  
 Webサイト [http://www.daido-it.ac.jp/topics/topi\\_02.html](http://www.daido-it.ac.jp/topics/topi_02.html)

**取組の概要**

本学の立地する名古屋市南部は、中小の工場と住宅とが混在する典型的な工住混合地域である。昨今の産業構造変革の影響を受け、この工住混合地域も変容を迫られ、住宅地としての意味合いを増大させている。その結果、工場と住宅との共生方法の具体的課題提案が各方面から期待されている。

本試みは、緊急に変容を迫られている地域や建築計画上の課題を、実際に授業の課題として採り上げ、街の人々や建築の利用者・所有者に直接提案することにより、学生の膨大な勉強時間を成績評価の為に使うだけではなく、学生、授業および地域に活力を得ることを目的とするものである。

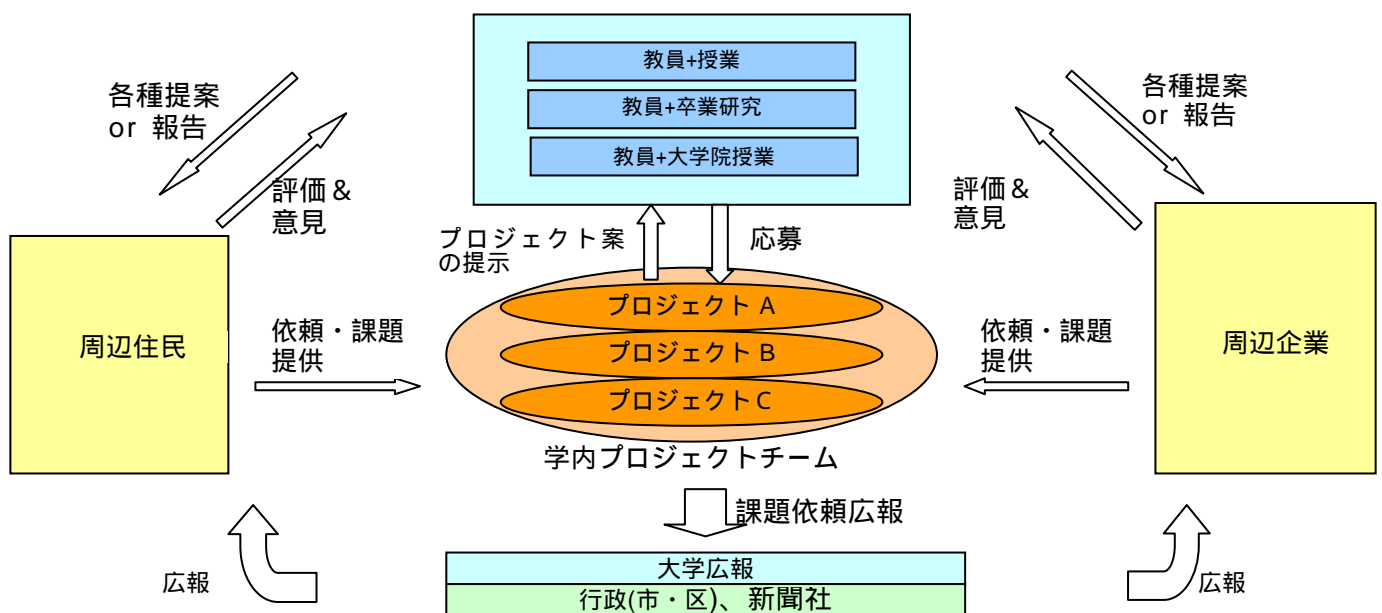
**実施の経緯・過程**

地域住民や企業、並びに行政が抱える課題を授業の課題として採り上げるプロジェクト事例は、平成18年度までに10プロジェクトを数える。下記に列記する某企業から持ち込まれた最初のプロジェクトであるProject は平成10年と11年に、本学の立地する名古屋市南区の協力を得て実現したProject は平成15年に実施したものである。

こうした実績を積む中、平成16年に現代GPの募集があり、選定と同時に、本取組みを推進する組織が設置された。事業推進代表者を学長とし、事業推進責任者を建築学科笠嶋泰教授を始めとする事業推進プロジェクト担当教員と事務担当者のプロジェクトチームを結成した。

各プロジェクトの課題は、大学の立地する区の街づくり推進室、周辺企業等の協力や依頼及び新聞での募集により集められ、学内の授業やゼミで実行する仕組みとした。

現代GP選定以前および選定直後は、建築学科の授業課題として採り上げていただけであったが、選定後工学部内の他学科との協力、他学部での実施が加わり、取り組みは全学的なものに発展すると同時に、現代GP選定による資金援助を受け、学生提案を実際に試作し、計画地に設置するプロジェクトに発展した。



地域活性化への教育推進体制概念図

以下は、取組支援期間内に実際に実施したプロジェクトを実施順に記したものである。

Project : 「循環式環境トイレ」の建屋デザイン(建築学科・設計・必修・2年後期/H10・11年度)  
依頼者は、大学近くに立地する某鋼材会社である。本学機械工学科の卒業生から、「バイオテクノロジーを利用した配水管を必要としない屋外設置式循環型環境トイレを開発したが、建屋のデザインが不評で、販売に結びつかない。公園や河川敷等美しい景観の中に置くことを想定したトイレの外観デザインを考えてほしい」との依頼である。

1年目の結果は実施に至らなかったが、2年目は、建設省中部地方建設局などが主催した「河川公園トイレ博覧会」に採用され、実現された。

Project : 「工場の敷地境界ゾーン」再考(建築学科・設計・選択・3年後期/H15年度)  
名古屋市南区街づくり推進室の協力を受け実現した課題である。協力先企業は、大学のある区内に立地する4つの工場である。内容は、「工場の敷地境界ゾーン再考」と称し、「工場前の道から工場の外壁までをリニューアルする」である。発表会には社長、工場長等が参加し、新聞・TVで報道された。

Project : 「リサイクルベンチ」の提案(建築学科・デザイン実習・選択・4年前・後期/H16~18年度)  
依頼先は、本学西側の工業専用地域にあるレストランの経営者とその近くでリサイクル業を営む企業主である。内容は、現在もリサイクル率が相対的に低い「塩化ビニール」をリサイクルし、無味乾燥なバス停に置く「再生材で作ったストリート・ファニチャーのデザイン提案」である。建設廃材の中から塩化ビニールを取り出し(依頼先のリサイクル業者担当)、協力企業で再生(現代GPで必要経費を賄う)し、採用された案は学生自ら再生塩ビを使用し、ベンチを製作した。

Project : 「堀川運河親水計画」の提案(建築学科・設計・必修・3年前期/H16・17年度)  
依頼協力先は、堀川沿いにヨット整備工場を運営する工場主である。課題内容は「私有地ではあるが、運河沿いのその場所を市民も親しめる場所とすること」を求めるものである。

H16年度の課題は、依頼主であるヨット修理工場の再生計画の提案が、H17年度の課題はこのヨット修理工場を含んだ運河沿いエリアの街並み提案が求められ、公開の発表会が開かれた。学生提案の多くに見られた運河沿いにリサイクル材で作ったデッキを建設した。

Project : 「コンクリートポンプ車修理工場」建替え計画(建築学科・設計・選択・3年後期/H16・18年度)

依頼先は、大学近くでコンクリートポンプ車修理工場を営む工場主である。依頼内容は、「現在の工場を、最近取得した隣地を使ってポンプ車4台分の修理スペースをもったオフィス(約150㎡)付き修理工場とするとともに、外から何をやっているか分かる建物としたい、また騒音で外の人や家に迷惑がからないようにもしたい」である。約2ヶ月間に渡って検討された各自の案は、依頼主や街づくり推進室のメンバーの前で発表された。

Project : 「駅舎・エコ広場・エコ街路計画」(建築学科・卒研ゼミ・選択・4年前期/H16年度)  
依頼先は、本学の経営者である大同学園である。依頼内容は、「名古屋空港開港や交通問題に対処するため、大学の近くを走る鉄道が高架化されることになり、この計画を鉄道会社に任せているばかりでなく、駅周辺を大学らしい雰囲気にするため、自らも積極的に提案していきたいとの学園の要望に応える構想案の提案」である。要請時期が2月であったため、授業課題として採り上げることができず、急遽ゼミ生の課題とした。結果的には、学生の案がそのまま採用されることはなかったが、実際に完成した駅舎は連想の開放的なものであり、学生の案が多大な影響を与えた。また、この時の学生提案である「駅舎・エコ広場・エコ街路計画」は、Projectの「自立型街灯計画」に引き継がれるとともに、その後実施された市による歩道拡幅計画に結びついた。

Project : 「自立型街灯の電気回路設計」(電気電子工学科・卒研ゼミ・選択・4年前期/H17・18年度)  
: 「自立型街灯のデザイン提案」(建築学科・デザイン実習・選択・4年前期/H17・18年度)

課題内容の「風車や太陽光発電を使った自立型街灯計画」は、平成17年度に学生から提案された「駅舎・エコ広場・エコ街路計画」の考え方に従い、その計画をさらに具体化し、実務型・実践型大学の歴史を形にするために行われた電気電子工学科と建築学科によるコラボレーション授業である。

電気電子工学科は、都市内でも十分その機能を活かせる風車や太陽光発電装置及びその電気エネルギーをLED(発光ダイオード)による照明装置に利用できるシステムの開発を、建築学科は街灯デザインの提案と試作品(2006年に実施予定)の製作を担当した。発表会は南区街づくり推進室及び本学学園理事

者等を招き開催した。

Project : 「笠寺商店街イベント用ポスターの制作」(情報学科・卒研ゼミ・選択・4年前期 / H17・18年度))

: 「笠寺商店街マップの制作」(建築学科・卒研ゼミ・選択・4年前期 / H17年度)

: 「笠寺商店街エコバックデザインの提案」(情報学科・卒研ゼミ・選択・4年後期 / H18年度)

依頼先は、大学の立地する南区内にある2つの商店街である。課題内容は、「衰退しつつある地元商店街活性化のためのポスターデザインの提案」、「エコバックデザインの提案」、「商店街マップ制作」等である。前二者の発表会は、大学内で公開し、後者の発表会は商店街内の集会所で開催した。ポスター、エコバックデザイン、マップとも商店街のお祭り時に実際に使用された。

Project : 「新幹線跡地」の計画(建築学科・設計・選択・3年後期 / H17年度)

依頼先は、名古屋市南区街づくり推進室である。課題内容は、「昭和61年に和解が成立した新幹線公害訴訟に伴う移転跡地28箇所(南区内のみ)9761㎡のうち、25箇所が利用されずにそのままとされている跡地の有効利用計画の提案」である。和解協定書には、「移転跡地は、良好な環境保全を目的に活用する」とあり、この考え方に沿った提案が求められた。

発表会は、移転住民と行政の双方の事情を考慮し、市・区担当者用と移転住民用との2回にわたって行われ、市・区側の発表会には名古屋市公害局及び南区街づくり推進室の担当者が、地元住民側の発表会には住民代表8名が参加し、両者とも活発な意見交換が行われた。

Project : 「街道沿いの住宅」提案(建築学科・設計・必修・2年前期 / H18年度)

: 「工場併設の住宅」提案(建築学科・設計・必修・3年前期短期設計 / H18年度)

依頼先は、区民を対象とした中日新聞系の折り込み新聞を通じ募集した近い将来に家を建てたいと考えている地元の住民である。H18年度の応募者は2件あり、一方を2年生の通常課題、他方を3年生の短期設計の課題とした。

2年生課題とした「街道沿いの住宅」の課題内容は、「近々に結婚する長男夫婦のための離れ」の設計提案である。「発表日には、依頼主の父親、折り込み新聞記者が参加した。

3年生課題とした「工場併設の住宅」の課題内容は、「自分の所有する工場に取り囲まれ、日当たりも少ない現在の住宅を取り壊し、1階を工場の倉庫、2・3階を日当たりの良い住宅とするとともに、将来の長男家族の子ども室も確保した三世代住居」の提案を求めるものである。発表会には、現役の老夫婦、若夫婦の妻、子どもの4人が参加した。

#### 目的に対する成果、人材養成面での達成度

前述した通り本試みの目的は、この膨大に費やされている学生の勉学時間とエネルギーを、地域住民、企業、行政の地域的課題や建築計画に活かすことにより、授業にも地域にも活力を得るところにある。

後述する如く、前者の授業への影響は予想以上の成果を上げたものと判断される。すなわち、学生の授業に対する取組姿勢は一段と向上し、授業に対する評価も高く、「熱い支持」を送ってくれた。

一方、後者の地域の活性化への貢献は、全てのプロジェクトにおいて企業主、住民、行政、建て主等の当事者から感謝されるとともに、中には40年間も頓挫してきた地域の課題に解決に向かった動きを与えるきっかけとなったプロジェクトもあり、この面でも予想をはるかに超える成果を得た。

#### 自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

H16年の現代GPの選定は、それまで建築学科の中で細々と展開されてきた本取り組みを全学的な取り組みとすると同時に、H17年の特色GPの選定を促すものともなった。このダブル選定は、教育重視の政策を打出していた本学に、教育重視の実態を与えるとともに、勇気と自信を与えるものとなった。

なお、H16年度に現代GPの地域活性化への貢献部門で同時に選定された近隣4大学の参加を得て、展覧会・シンポジウムを金山都市センターで開催した。展覧会には1600人が訪れ、入場者が普段のイベントの1.5倍であったことから、多くの市民の方々に興味を喚起したと判断できる。その後のシンポジウムでは、今後の持続方法も含め様々な意見交換を行うとともに、討論終了後、各大学より本イ

ベントへの参加は実りあるものであったとの意見が寄せられた。

#### 学生等の評価

学生提案発表会の参加学生に「地域課題を授業に取り込むこと及び公開発表授業について」の自記自由記述式の調査をおこなった。以下の意見は、その一部である。「本当に作られる可能性があるので、とても真剣に取り組み、とても良い授業だった」「地域への貢献が可能と感じた」「実際にユーザーの気持ちを視野に入れた貴重な体験ができた」「発表をもう少し多くの人にみてもらいたかった」「学外の人に見てもらふことは、緊張感があって良いと思いました」等などであり、多くの参加学生から高い評価を得た。授業担当教員からは、学生が本取組みを「高く評価している」というより「強く支持している」と言った方が現実に近いとの報告を受けた。

#### 学外からの評価

学生提案に対する依頼者、本学の教職員、マスコミ等の評価は、「提案に好感がもてた(依頼者)」「効果は多大(依頼者)」「感心した(資材提供者)」「もっといろいろと聞きたい(依頼者)」「学生も十分地域貢献可能である(学園関係者)」「このような訓練が、学生の将来に必ずプラスに働くと感じた(学園関係者)」「アイデアに注目すべき点がいくつか見られた(地元行政職員)」「時代の要請であり、今後ますます発展させていくべきもの(地元行政職員)」「具体的な提案を図面と模型で説明して頂き大変驚いた。できるだけ学生さんの提案を採用した工場が出来れば良いと考えています(依頼者：工場長)」「『隔離され、暗く高い工場の内側では何をしている?』のキーワードから生まれたアイデアは、外に知らせることで深まる“安心感”を、住民たちの地元への興味や愛着につなげたいというデザインでした。学校という大きなプレゼンテーションルームから発せられるパワーは、確かに街を動かそうとしていました。(NHK名古屋放送局報道部リポーター)」である。

発表会に参加した行政、理事者等の大学関係者、マスコミの方々が等しく受けた印象は、「何故学生たちがこうまで『強く支持』するのであるのか」である。おそらく、「自分たちの主張に本気で耳を傾けてくれる人々がいる」体験をしたこと、また「自分が、誰かにとってかけがえのない存在になり得る可能性がある」体験をしたためと思われる。

また、地元住民用発表会に参加した名古屋市議会議員は、「数十年間に渡って頓挫してきた問題が、この発表会で動き出す可能性があり、画期的なことである」と本イベントを高く評価された。

このことは、住民、行政、民間企業にも手を出せない社会的問題に、授業を通じた学生の行動が解決の糸口を示したことを意味し、大学教育の新たな地平を発見したものと考えたい。

#### 取組支援期間終了後の展開

本取組みに対する支援が終了してから半年が過ぎる。この間、街の課題を授業課題として採り上げ、街の人々に実際に提案する取組みは、既に3プロジェクトを実施した。Project の「自立型街灯のデザイン提案」、Project の大学近くの商店街の「イベント用ポスターデザイン提案」、Project の新聞で募集した課題を採り上げる「小住宅の設計提案」である。このように、現在も本取組みを持続している。

このことに加え、本年度6月に、デザイン分野で著名なプロを輩出しているイタリアのミラノ工科大学と学術提携を結んだ。両大学の建築学科の建築計画・企画提案教育の一部で共通課題を設けお互いに授業として取り組んでいる。本年度の課題はミラノ工科大学が、来年度は本学が提案する。このように課題収集力を高め、本取組の一層充実した内容を図っている。